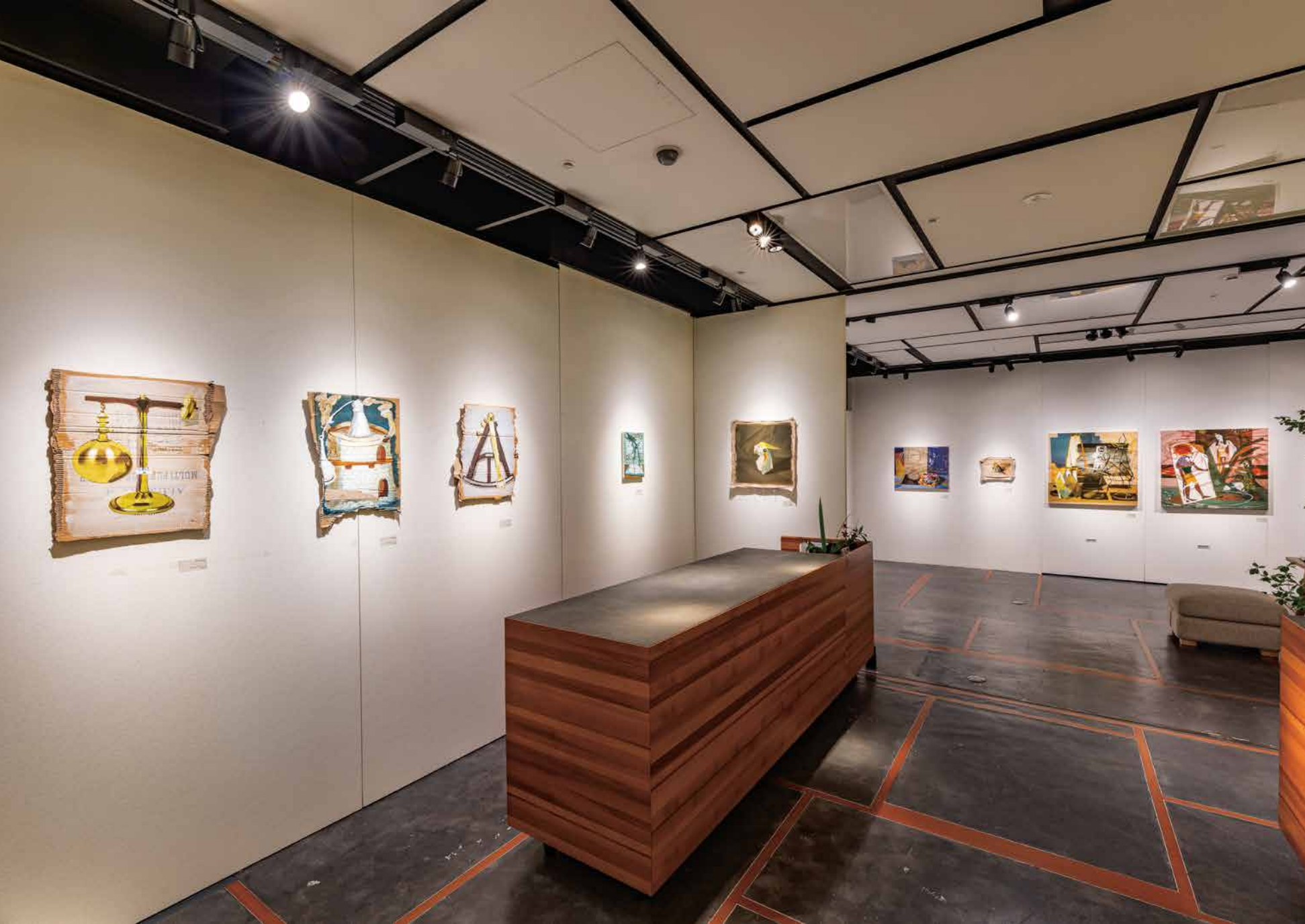
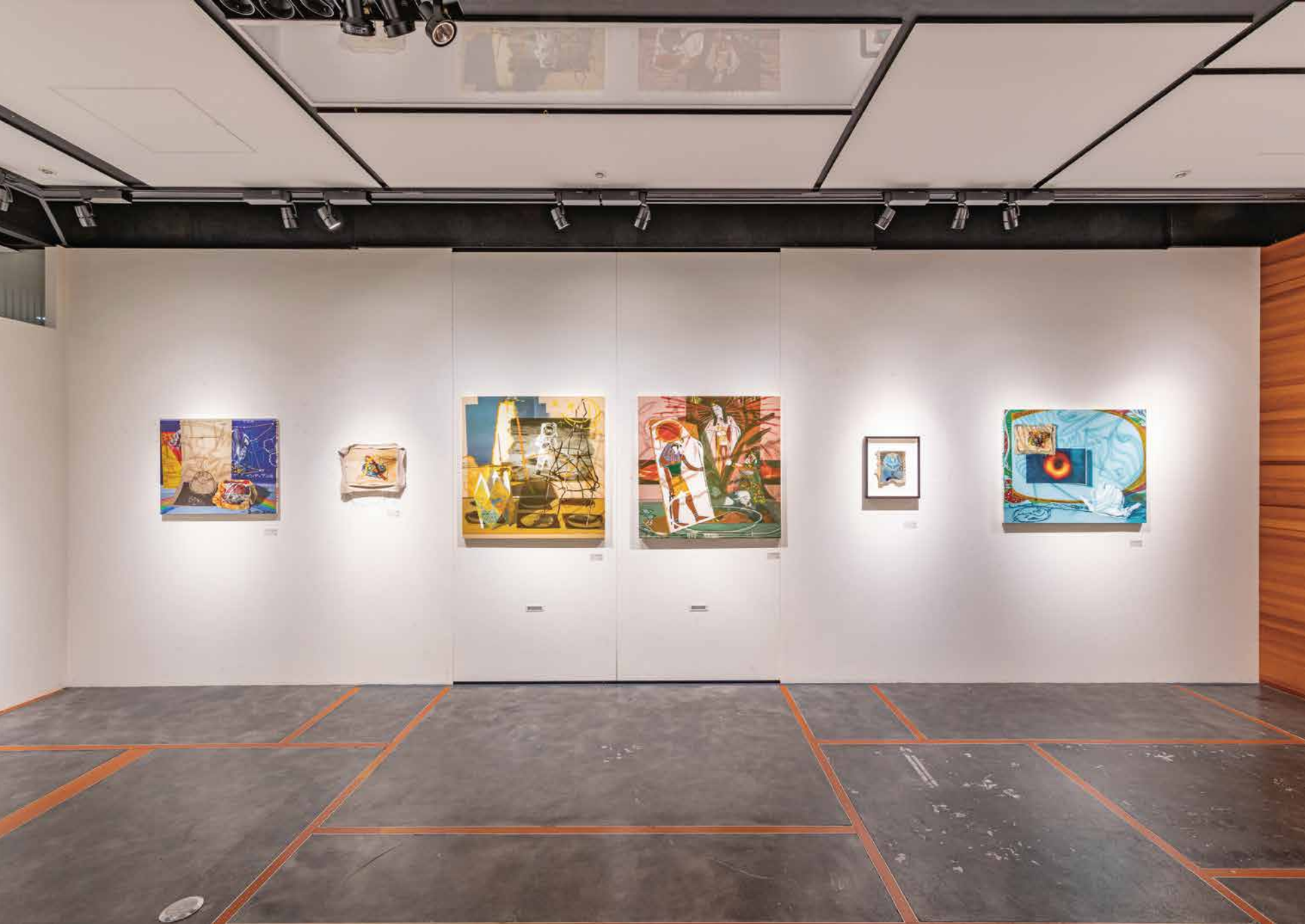
coniunctio

Ryoko Kumakura solo exhibition

GALLERY SHU





Auntie Mame

科学知への意志——熊倉涼子「coniunctio」における表象の布置

安井 海洋（美術批評）

熊倉涼子は、人間が自然を理解しようと試みる過程で生まれた表象を収集し、絵画として描く。それらは錬金術など失われた知の体系で用いられた暗号から、現代における最先端の観測機器がとらえた画像までと多岐に亘る。個々のイメージは元の歴史的な文脈からいったん切り離され、彼女自身の作品として再配置される。その組み合わせを通じて、既存の科学史とは異なる、オルタナティブな歴史の記述を試みるのである。ここでは本展の示す歴史の内実がどのようなものであるかを考察する。

初期の作品からある物の表象を描いてきた熊倉は、個展「PICTOMANCY」（2016）ではぬいぐるみ、永井天陽との二人展「DI-VISION/0」（2018）では折紙やペーパークラフトなど、実物の形態を模倣したものをモチーフに採用している。一方、個展「Pseudomer」（2018）以降、描かれる表象が、対象を示す筋道に基づいて大きく二通りに分かれる。C. S. パースの記号論を参照しつつ整理すると、ひとつはイコンにあたり、実物を写した写真のように、形態等の類似によって対象と結びつけられる。もうひとつはインデックスにあたり、十字架がイエスを示すように、時間や論理などによって対象を指し示す。「DI-VISION/0」以前の表象はイコンに限定されていたが、現在ではイコンとインデックスの両方を描くのである（旧作におけるイコンを繰り返し描くことによる模倣という行為の問い直しについては、今は問わない）。

今回出展した《Still Life with Artifacts about the Moon》にも二通りの表象が描かれる。台座にモチーフを並べ、奥に壁を立てた絵画内空間は、静物画の様式への目配せを感じさせる。台にはガリレオによる月面のスケッチ（を熊倉が模写したもの）が敷かれ、その上に月球儀のペーパークラフトと針金で組んだロケットの模型が並ぶ。壁にはスペースシャトル発射時の画像と月面を歩くアポロ 11 号の宇宙飛行士の画像をコラージュする。ここで月面のスケッチと月球儀がイコンに、ロケットの模型と二枚の画像がインデックスに該当するといえる。

注目すべきはモチーフの布置である。二枚の画像を横断するように上からドローイングが描かれることで、画像の境目は無化される。さらにドローイングが画像から壁面にはみ出した部分には、画面外の左手前を光源とする月球儀の影がかかり、壁面や画像と融け合っている。この描写は、各々の歴史的背景を持つ表象が、しかし反撥し合うことなくひとつの空間に調和的に収まっていることを象徴したものだろう。こうしたモチーフの布置を通して、絵画は月にまつわる人類の思想史を記すのである。

イコンとしての表象の場合、直感によって対象との類似性を把握することができる。しかしインデックスは、歴史的背景や論理など、社会における因果関係を把握していなければ対象と結びつかない。熊倉はインデックスとしての表象を描くことで、表象それ自体のみならず、その背景にある人為への関心を表明している。

モチーフ間の関係性の構築はひとつの作品内だけにとどまらない。月の絵画と、太陽の表象を集めた《Still Life with Artifacts about the Sun》は、会場では隣り合って設置されている。錬金術には術物質を結合させる作業を指す「化学の結婚」という言葉があり、その作業はしばしば太陽神（ソル）と月神（ルナ）の姿で図像化されるが、二枚の絵画はこのことを踏まえて並置され、異質な表象を集積した会場の寓意となっている。

またブラキオサウルスの折紙が描かれた《トリの進化論》と、ブラックホールの画像を引用した《Still Life with Artifacts about Astronomy》が向い合せになっている。折紙は、多くの場合一見しただけでは何を表しているのかが判別できず、名前＝言語による説明があって初めてモデルが伝わる。他方でブラックホールの画像はインターネットや新聞を通して広く知られているため、被写体がブラックホールであることを把握できる。しかし画像は重力波という宇宙空間の振動＝音を、地球上に点在する観測所が検出し、人間が知覚しうる視覚イメージに翻訳したものである。

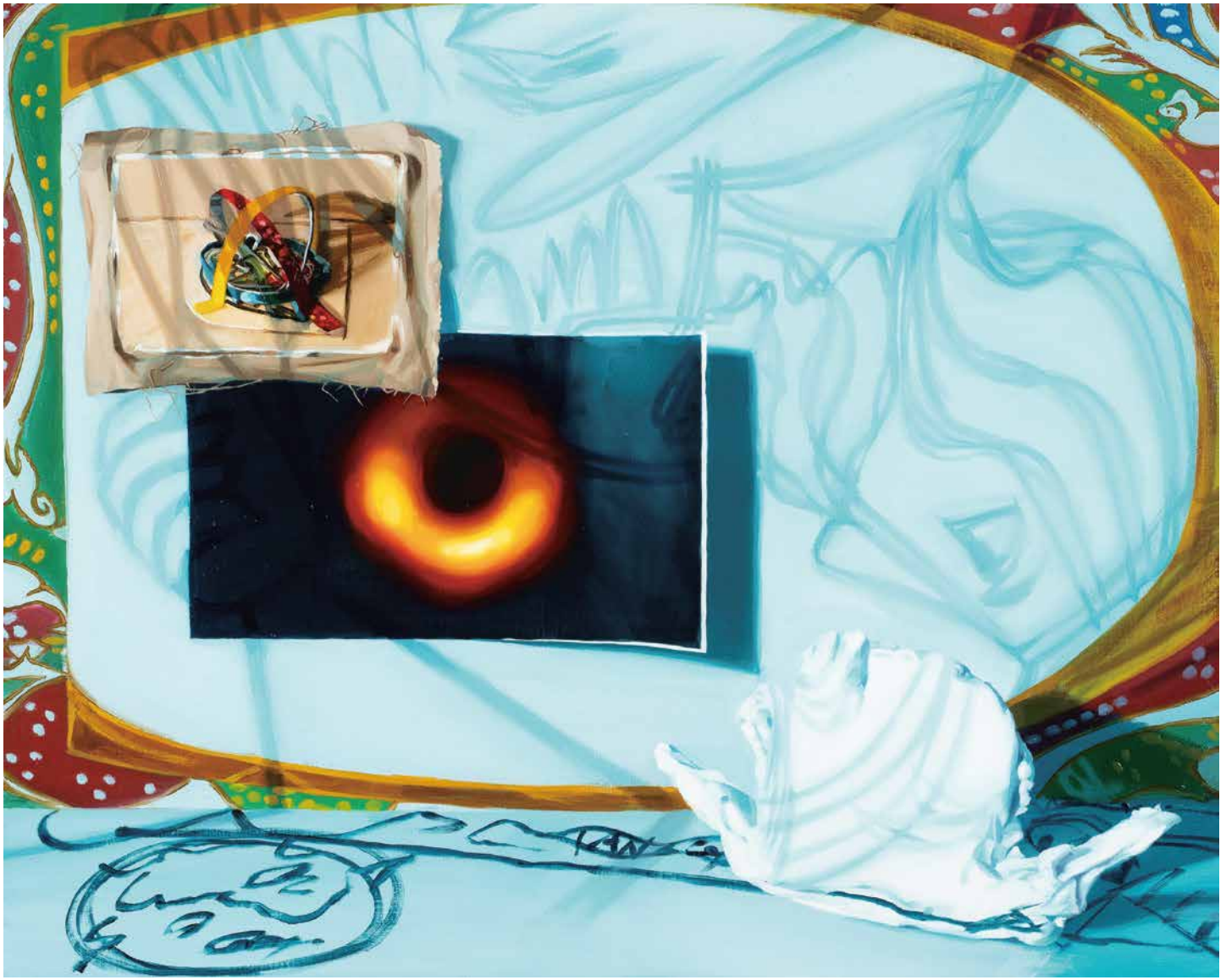
これらはどちらもイコンに該当する。しかし、言語による説明を要する前者と、言語は不要だが実物に幾重にも処理を施した後者とでは、対象と結びつくまでの筋道が対照的だといえる。そしてその差異は、両者が差し向いに位置することで顕在化するのである。この展示に集められた表象の出自は多様だが、その性質もまた多様だといえる。

さらに、関係性がモチーフの用途によって表される場合もある。国際キログラム原器を写実的に描いた絵画の左右には、顕微鏡の絵画と、錬金術の蒸留器にまつわるモチーフを集めた《Still Life with Artifacts about Alchemy》がある。取り上げられているのはいずれも自然を観察・計測するための器具であり、人間の五官だけでは認識しえない現象を捕捉し、理解するために使用される。これらの器具は、世界の仕組みを知ろうとする人々の意志が生み出したものである。科学史とは、彼らの自然理解への意志に貫かれた歴史だといえよう。

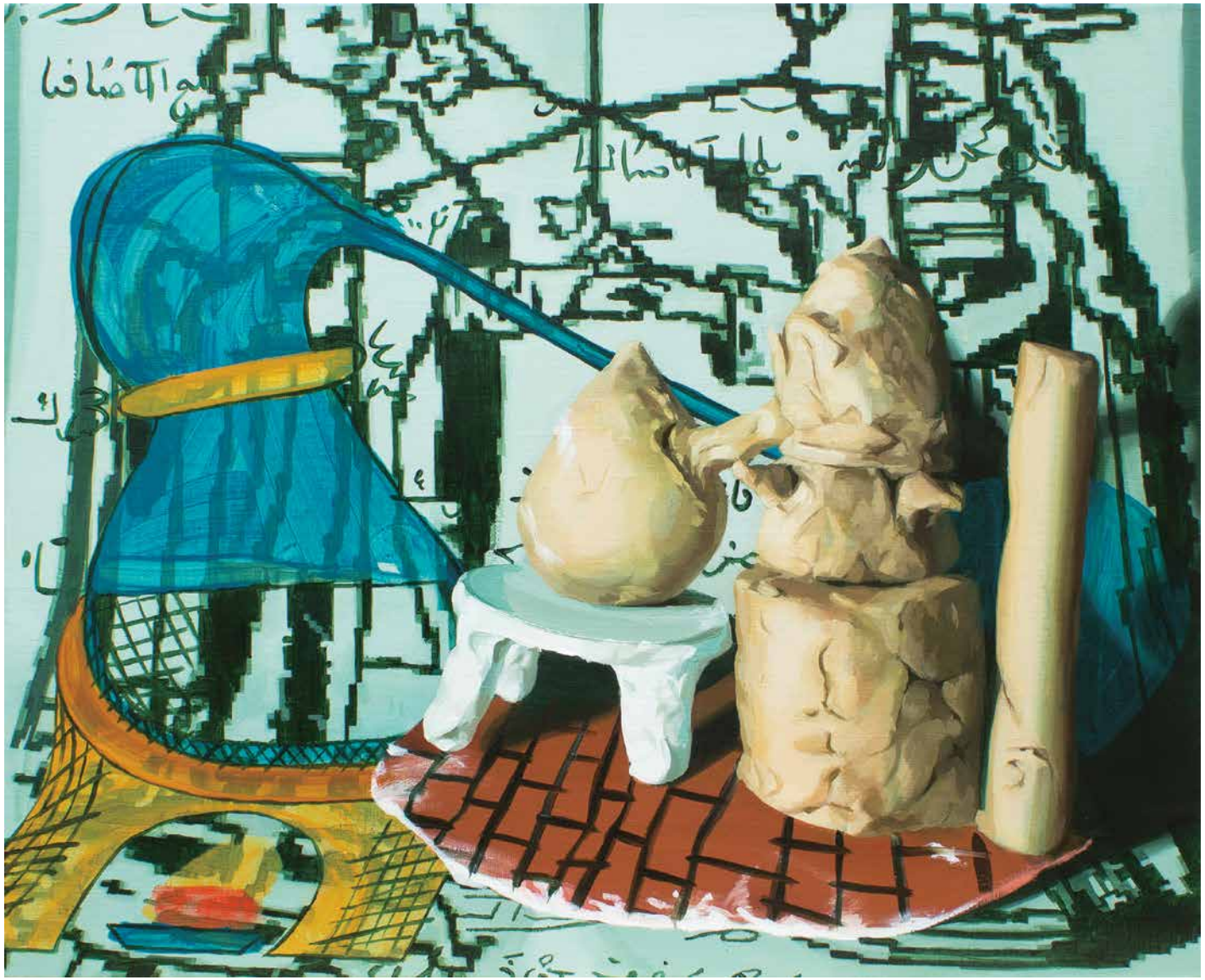
科学史における膨大な表象を収集し、布置することで記述されたのは、こうした知への意志である。17 世紀における自然科学の急速な発達は、前世紀のアルブレヒト・デューラーに代表される芸術家たちが計測を重視し、その成果を印刷物の図表によって普及させたことで初めて成立したとされる（山本義隆『一六世紀文化革命』 1）。イメージを恣意的に創造せず、あくまで目に映る現実を描き続けてきた熊倉もまた、こうした自然主義の理念を持つ芸術家たちの系譜に遠く位置づけることができるだろう。科学の担い手と彼女との親和性が、この展示の通奏低音をなすのである。

Transient Images

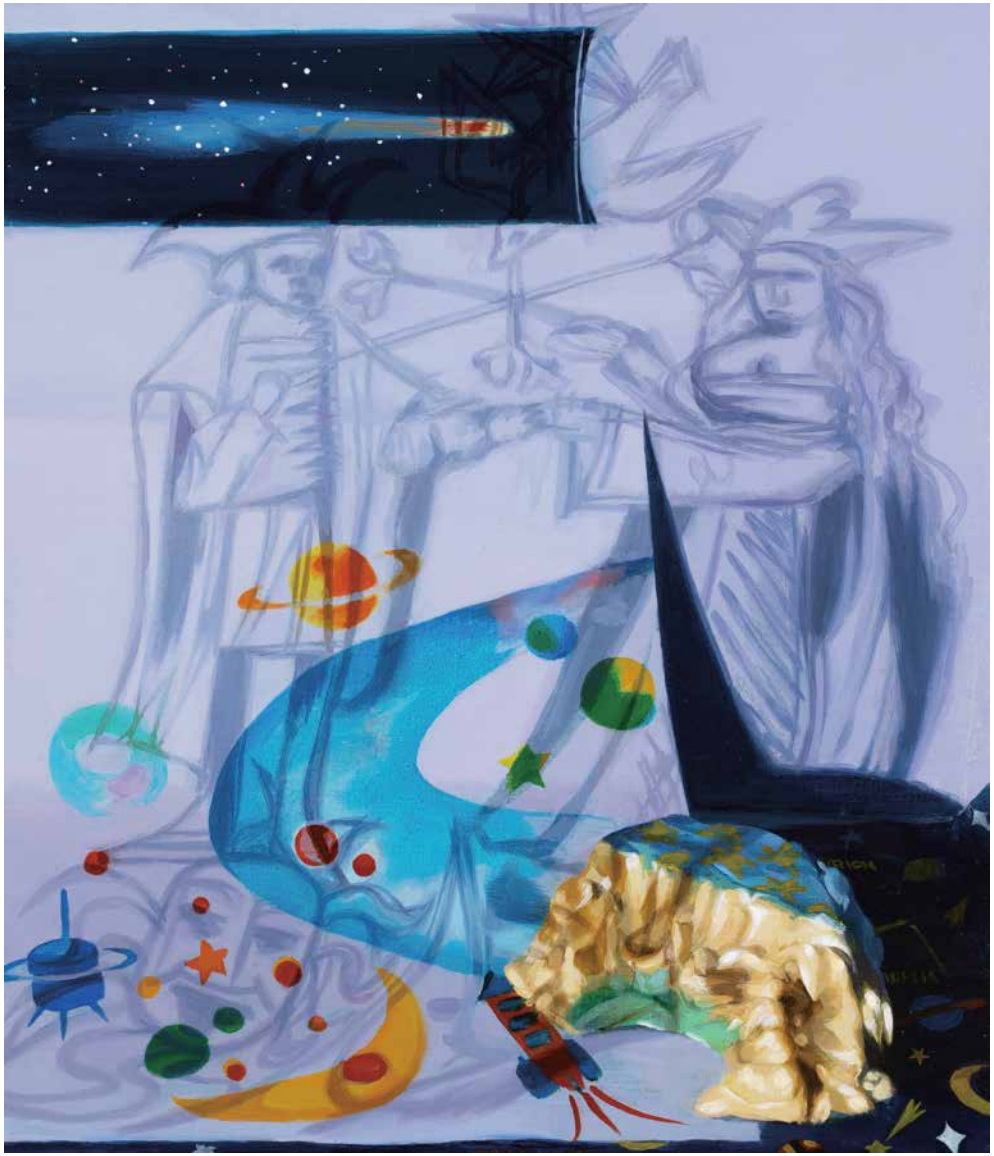
International Prototype of the Kilogram



Still Life with Artifacts about Astronomy



Still Life with Artifacts about Alchemy



Conjunction

キリンの表象

MEDEL GALLERY SHU

CONTEMPORARY ART REVIEWS

vol.1 熊倉涼子 個展「coniunctio」

2019 年 8 月 7 日 (水) - 8 月 18 日 (日)

MEDEL GALLERY SHU

〒100-0011 千代田区内幸町 1-1-1 帝国ホテルプラザ 2F

作品リスト：http://ngmrsk.jp/wp-content/uploads/mgs-car-1-list.pdf

会場図：http://ngmrsk.jp/wp-content/uploads/mgs-car-1-map.pdf

キュレーション・編集：飯盛 希

撮影：松尾宇人

発行：2019 年 11 月